
~ I S ~ 創造録

ジョン次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～ISS～ 創造録

【Nコード】

N2314BA

【作者名】

ジョン次郎

【あらすじ】

神様のミスで殺されて転生したらISSの世界だった。能力は選べなかったけどチートな能力くれたので取り合えず生きて行く事に……

初投稿です、拙い文章ですがよろしく願います。

プロローグ

『すまないが……転生して貰えないか？』

『……………え？』

気がつけば真っ白い空間の中、申し訳なさそうな顔をしておっさんが俺に話し掛けていた。

~~~~~

『実は、今日死ぬはずの人間と間違えて殺してしまったんだ。』

この事が私の上司に知られるとまずいのでね、転生する形でこの事故の隠蔽をしたいのだよ。』

なるほど、信じられないけどこんな訳の分らない事を言ってくるって事は、

あんたは神様か何か？

『その通り、とは言っても中堅クラスの神様だがね』

地味に思考を読むな、

『そう言うな、思考を読んだほうが口に出して会話するより早いだろう？』

そんな事より転生してはくれんかね？何か特殊な能力を上げるから。

『

特殊能力かあ、それは自分で決められるの？

『いや、こちらで決める。とゆうか、もう決めてある。』

どんな能力だ？

『触った物を創造でき、創造したものを自在に操る事が出来る能力だ。』

一度触ったら回数回数の制限無く創造する事ができるぞ

それに加えて創造した物同士で合成する事も可能でそれらを消す事も可能だ。』

へえ、かなりチートだな。

『ついでに転生する世界もこちらで決める。こちらも生まれてからすぐに死ぬ様な』

世界じゃないから大丈夫だ。』

わかった。転生しなかった場合はどうなるんだ？

『永遠にこの空間を彷徨う事になるな。』

なるほどね、選択肢はあつてないようなものじゃあないか、分かった転生するよ。

あと一つお願いしていいかな？

『構わないぞ』

身長を大きくしてくれないかな、生前でちょっとしたコンプレックスだったから。

『そうか分かった、では転生するぞ。』

さて、どんな人生を歩む事になるのやら、  
まあ、第二の人生を楽しむか。

## プロローグ（後書き）

うん、小説を書くのは初めてですが、これは小説と言えるのでしょ  
うか？

## 主人公設定

名前

四倉しぐら辰哉たじや

経歴

神様のミスで転生した転生者。

転生した直後に周囲の人物から自分がISの世界に転生した事を知る。

原作知識はあまり無いがとりあえず原作を近くで見たいので登場人物、特に一夏

とは仲良くする、とゆうか仲が良い

容姿

黒髪で顔は中の中位

神様へのお願いで身長が平均より大きくなってる。

というか、でかい、それもかなり

能力

触った物を創造でき、創造したものを自在に操る事が出来る能力  
非常に応用ができ、一度触ったら回数回数の制限無く創造する事ができる。

また、創造した物同士で合成する事も可能で消す事も可能

## 第一話

（side一夏）

これは想像以上にキツイ

俺以外全員が女のこの教室で唯一の男である俺にはほぼ全員分の視線を背中に浴びている

「皆さんISS学園に入学おめでとう、私はこのクラスの副担任の山田真耶です。」

一年間よろしくお願いします。」

視線に耐えてると、先生が入ってきた、まるで子供が背伸びをして大人の服を着たような

幼い印象の人だな、一部を除いて。

「このISS学園では……ISSの……で……」

先生は頑張って色々言っている様だが頑張れば頑張るほど先生の胸が揺れて

つい、そちらを見てしまう、俺がそれにつられて目を左右に動かしている

窓側の席から凄い殺気が飛んできた。

驚いて窓側を見たら殺気の犯人は冴らしい、



(怖い事するなあ、仕方ないじゃないか男の性なんだから)

「……………君……………斑君……………織……………君……………織斑一夏君!!」

「ッ！ハイッ」

「あのく、大声出しちゃってごめんなさい、でも「あ」からはじま  
って今「お」

なんだよね。自己紹介してくれるかな、駄目かな？」

心の中で色々愚痴を言っていたら呼ばれている事に気付かなかった。

驚いて声が裏返ったじゃないか、入学初っ端から恥かいたかったよ

自己紹介か、よし此处でカッコよく自己紹介してさっきのぶんを取  
り返さなきゃな

「えく、えつと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

なんだこの視線はもっと自己紹介しろってか、いかん、ここで黙っ  
たままだと

暗い奴のレッテルを貼られてしまう。覚悟を決める織斑一夏、

「スウ、」

落ち着いて息を吸って

「以上です。」

言い終わった瞬間に周りの女子達がずっこけた。

あれ、カツコよくきめたのに

「あれ、駄目でした？」

キョロキョロと周りを見てみると急に頭を殴られた。

殴られた相手を見るために後ろに振り替えるとそこには千冬姉がいた。

「げっ千冬姉、」

何が駄目なのか、もう一発殴られた。

「学校では織斑先生だ。」

「先生、もう会議は終わられたんですか？」

山田先生がそう言う

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押しつけて悪かったな。」

なんで千冬姉がここにいるんだ？

職業不詳で月に一〜二回しか帰ってこない俺の実の姉が、

「諸君、私が織斑千冬だ君たち新人を一年で使い物にするのが仕事だ。」

「千冬様、本物の千冬様よ」

「私お姉さまに憧れてこの学園に来たんです。北九州から」

「私、お姉さまのためならしねます」。」

凄い人気だな、

「よくここまで集まる物だ私のクラスにだけ集中させてるのか？」

「お姉さま、もっと叱って罵ってえ」

「そして時には優しくして」

「付け上げらないように調教してえ」

「千冬姉が俺の担任？」

「で、挨拶もまともに出来んのかお前は」

千冬姉が指を鳴らしながらこちらを見てくる。

「いや、千冬姉、俺は、うぐっ」

ここまで言いかけた所で千冬姉に頭を机に叩きつけられた。

「織斑先生と呼べ」

「はい、織斑先生」

「え、織村君つておの千冬様の弟？」

「それじゃ、世界で唯一ISを使える男つてもそれが関係してるのかな？」

周りの女子達が小さな声で話している、ISに乗れる理由なんて知らないっーの

「静かに！」

千f：織斑先生の声で皆静かになる。

「では、少し事情があつて遅れた生徒を紹介する。  
入ってこい、四倉辰哉」

ガラガラと教室のドアを開けると、そこには自分の友人の大男が立っていた。

〈side辰哉〉

この状況は予想以上にキツイ

どうも、はじめまして転生者こと、四倉 辰哉です。

一夏を除くすべての生徒が女なのか、

やっと原作開始かあ、ここまで長かったなあ

とりあえず、扉が開いても視線が刺さって教室に入れない

教室に入る覚悟を決めてる間に

回想どろろ。

~~~~~回想~~~~~

「おい一夏、本当にこっちで大丈夫なんだろうな？」

一夏は今とても焦っている、なぜなら今俺と一夏は迷子になってるからだ。

ちなみに俺は焦ってない、原作でこうなる事は分かってたからね。

一夏が初めてISを動かす所を見たいしね。

にしても、何で束ねさんは一夏と俺が迷うようにしたのだろうか？

俺が束ねさんに連れられて束ねさんの研究所に言った時はISを動かせなかったのに、

俺まで一緒に迷子にしても良かったのだろうか？

そんな事を考えてたら一夏が何か思いついたみたいだ。

「よし、次に見つけた扉を開ける。」

ほお、じゃあたぶん次の部屋にISが置いてあるのかな？

「わかった、それに従うよ。変な部屋開けるなよ。」

とりあえず返事をしとく

「お、扉発見、突入するぞ！」

「へいへい」

扉を開けるとそこにはISが二体鎮座していた。

「これって……IS、だよな。」

と一夏が言う

「そうだろ、ちょっと……触って見ないか？」

ここで俺が一夏がIS触れるように促す、

「でも、勝手に触っても平気かな？」

「大丈夫だって別に何も起こらないよ、それにばれなきゃ良いしね」

そう言うと一夏はISに近づいてそれに触った。

「どうだ、一夏どんな感じだ」

そう質問してみると

「すげえ、触ってるだけなのにISの情報が頭の中に入ってくるみたいだ。」

なるほど、ちゃんと起動してるみたいだな。

その後一夏がISに乗ってる所を発見されIS学園に入る事が決定した。

その際、俺もISに乗れないか調べた（触ってみた）が残念ながらISは起動しなかった。

しかし、ISに乗れない事が分かったので家に帰り

居間でゆっくりしている時に事件は起きた。

ピピピピピ…ピピピピピ…

といきなり携帯電話がなり始めた。

その携帯電話の画面には「篠ノ之 束」と表示されていた。

出ないわけにもいかないのととりあえず出てみると

「やつほ〜束ねさんだよ。ねえねえ、たつくんIS作ってよ。」

唐突に訳の分らない事を言われた。ちなみに「たつくん」とは俺の事である。

「束さんは知ってるよ今まで隠れて色んな物を創造してたよね。しかも何か創造するには

それを触らなきゃいけないんだよね。だから今日触ったISを創造してほしいなあ。」

「な、なんで束さんがそれを知ってるんですか？」

とにかく、聞いてみる。もしそれ以外の、例えば男の子の営みとか見られてたらマズイ

「君の部屋にはあらゆる所にカメラが仕込んであるのだ。ブイブイ」

なんてこつたい、

「どれくらい、盗撮してるんですか？」

確認だ。これを確認しなければ今後一切この部屋では色々と抜く事が出来ない。

「盗撮だなんてひどい事言うなあ、ううんとねえ、一日に君がその部屋にいる時間だけ

見てるよ。」

この部屋にはもう入らない様にしよう。

「ねえ、たつくん速く作ってよ。ねえねえ速く速く！」

そんな事より、

俺の触った物を創造でき、創造したものを自由に操る事が出来る能力

(長い名前だな)は、ばれてたみたいだ。

「はあ」

溜め息と返事を混ぜたような言葉を吐き出し、束さんには何を言っても無駄なので

今日触ったISを創り出す。

「束さん、創り終わりましたよ。」

「じゃあ、そのISに触ってみよう。」

何をさせたいのか、とりあえずそのISに触ってみると、

俺はISを起動させていた。

どうやら自分で創った物はISだろうと自在に操る（起動させる）事も出来るらしい。

その後、今やった事は束さんにより録画されており、千冬さんにはれて、IS学園に

入る事になったのだ。

~~~~~回想終わり~~~~~

## 第一話（後書き）

会話だけになると何してるか分からなくなるのでそうならない様に  
気をつけてるのですがダメダメですね。

## 第二話（前書き）

一人でもお気に入りに入れてもらえるのはとても嬉しいです。  
ありがとうございます。

## 第二話

（side辰哉）

教室の全員の視線を浴びて教室に入るタイミングを逃した俺は  
教室の開いた扉の前で突っ立っていた。

「何時までそんな所にいる、さつさと入って来い。」

「は、はい。」

今千冬さんから声を掛けられなかったらずっと入れなかったな

千冬さん、有難うございます。

感謝の意味を込めて目線を送ると鼻で笑って返してくれた。

「よし…四倉、自己紹介をしろ。」

相変わらずな高圧的な声で命令してくる。

「はい、分かりました。四倉<sup>びんし</sup>辰哉<sup>たつや</sup>です。

一夏の後にISを動かせるか試されて（束さんに）動かす事に成  
功したので、

入学が決まりました。高校生活の三年間よろしくお願いします。」

千冬さんにオーラに押されながら

ハキハキ（ダラダラしたら殺される）とした声で自己紹介をする俺  
無難な挨拶だと思いが千冬さん的にはまともに挨拶出来ているだろ  
うか？

「ふん、まあ良いだろう。」

良かった。一夏みたいに叩かれなくて済んだぞ。

「きゃやああ！！」

自己紹介しただけで悲鳴が上がっている何てカオスなクラスなんだ。

「男の子？」

「しかも二人目！」

どうやら男がいる事に驚いているみたいだな。

「辰哉！？なんでお前まで此処にいるんだ？」

一夏が最もな疑問を主張する。当たり前だな、一夏がISを初めて  
動かした時

に俺はISが動かさなくてそのまま帰ったんだから。

「実はあの後で家に帰ったらあるウサギの人から電話が来てね、  
その人が用意したISを動かしちゃったんだよ。」

そういつて一夏の疑問に答える、最初は「ウサギの人？」とか言っ  
ていたが

心当たりがあるのか、「ああそう言う事か。」と言って納得していた。

「私語を慎め馬鹿者ども」

と千冬さんが注意をしてくる。

「ああ、悪い千冬姉」

と此処でまた一夏が殴られ、「学校では織斑先生だ」と注意を受けている。

「すみません、織斑先生。それで俺の席は何処ですか？」

俺は一夏見たいに殴られたくないのでも千冬さんではなく織斑先生と呼ぶ。

「四倉、お前の席は窓側の一番後ろだ。お前は図体が大きいからな、配慮しておいた。」

お、それは助かる。転生の時に身長を大きくしてくれとお願いしたら195cm位まで身長が伸びてしまった。平均より2〜3cm大きい位で

お願いしたつもりだったけど神様はとにかく大きくとその願いを受け取った

らしい。

席も決まった所でHRが続けられるのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2314ba/>

---

～ I S ～ 創造録

2012年1月6日14時47分発行